

S. Iwanoto

神学と人文（大阪基督教短期大学紀要）第23集 1983年12月発行 抜刷

第18世紀初期における英国国教会福音派

岩 本 助 成

第18世紀初期における英国国教会福音派

岩本助成

ジョン・ウェスリらのメソジスト運動は、連鎖的な運動の一つである。ステレオ状に鳴動して拡大していった運動の一つである。国内的には、メソジスト運動よりも古い起源を有する国教会福音派が、ウェスリ兄弟の回心時期には既に活発な働きを展開していた。(ある観点からすれば、両派の運動はかなりの重なった部分を持つと考えられる。) 国際的には、筆者が前稿で考察した「ドイツ敬虔主義の流れ」とメソジスト運動との深い関連が指摘される。又、「アメリカにおける信仰復興運動や大覚醒」との深い交差も忘れてはならない。従ってメソジスト運動を、第18世紀英国という時代的、地域的限定のみで捉えることは、正鵠を得ていると言えない。近代ヨーロッパ及びアメリカという拡がり視野を持ち、今日までの複合的関係の歴史的發展を考察する「メソジスト運動史研究」が必要である。

本小論はメソジスト運動に対するより正しい理解を得るため、同運動の母胎の一つであり、又、今日に至るまで、同運動と深い関連を持ち続けている「国教会福音派の歩み」を、第18世紀初期における先駆者を中心に考察したものである。わが国においては、この分野の研究は決して多くない。第18世紀の英国自体、実に「多様性に富んだ時代」である。福音派が関わりを持った庶民階層を中心にして新たな国民的胎動を始めている時代だと理解するのは筆者ひとりではあるまい。ところがこの興味深い時代が、依然、「理性の時代」とか「啓蒙の時代」として単純に割り切られてしまっていることに寂然としないものを感じる。小論が少しでも、「教会の真の担い手」であり「歴史の担い手」でも

ある「無学の凡人」として生きた福音派の面目を描くことができているなら、嬉しい限りである。

I 英国国教会福音派に関する研究

A 用語をめぐる

「福音主義者(又は福音派)」という用語を調べて、*The Oxford Dictionary of the Christian Church* の当該項目を開いて見よう。辞典は3種の用法を示す。①宗教改革以後、「福音」を高調したプロテスタントを総称したもの、②ドイツやスイスにおいて「カルヴィニスト(改革派)」に対してルター派を指す名称、③英国国教会内において、キリストの贖罪による救いと個人的回心を強調する一派で、メソジスト運動などと関係をもつ等と叙述してある。⁽¹⁾ ここで筆者の用法が③を指すことは、表題を見ても明らか通りである。

さて、オックスフォード大学ジーザス・コレッジのウォールシュ(John Walsh)は、上記③の用法を更に区分する。即ち、福音信仰覚醒運動(Evangelical Revival)に関連した「あらゆる福音派、福音主義者」を“evangelicals”と呼び、この運動に関連した「英国国教会内の福音派、福音主義者」を“Evangelicals”と呼んで両者を区別している。⁽²⁾ この用法はより厳密なので、筆者も前者を「福音派」、後者を「国教会福音派」と区別して呼ぶことにしたい。

ウッド(A. Skevington Wood)も注意を促している点であるが、⁽³⁾ 国教会福音派とメソジストとを対立的図式でとらえず、また、混同も

しないことが大切である。また、国教会福音派はカルヴィニスト、メソジストはアルミニアン、などと単純に仕分けしない方が賢明である。両伝統は実に微妙に入り組んでいたからである。更に、今日の国教会福音派が低教会(Low Church)的伝統と共通点を多くもつ故に、第18世紀においても同様であったと早合点しない方がよい。当時、低教会的伝統の人々は信仰覚醒運動の反対派として活動していたからである。サッシュェヴァレル(H. Sacheverell, c. 1674-1724, 高教会派でトーリー党に立つ聖職者)の批判を割引いて聞くとしても、当時、低教会の人々がラティテューディナリアンの伝統を守って理性や人間的自由を高調し、理神論者やソツィニ派を輩出していた傾向は否めない。

なお、いつ頃から「国教会福音派」なる用語が用いられ始めたかは不明である。1759年、Thomas Haweis という人物が後述のサミュエル・ウォーカーを評して「福音派」と称している。それが比較的、初期の用法であろうとされている。そして第19世紀初頭に、「英国国教会内の一派で、メソジスト運動とは一線を画そうとした人々」を「国教会福音派」と呼ぶに至ったらしい。しかし上述の通り、彼らとメソジスト運動という両派の色分けに腐心してはならない点を再び注意しておきたい。

B 研究の現況

英国国教会の研究者を中心に、国教会福音派に関する研究は進められてきた。⁽⁴⁾ 古くはエリオット・ビンズ(L. E. Elliott-Binns)の2著作が興味深い。彼は前著で、国教会福音派を「メソディズムからの派生、支脈(offshoots)」と考察した。しかし25年後に公刊した著書ではこの見方を改め両者の関係をより正しく解釈した。⁽⁵⁾

ウッドの概説書は「福音派による福音派の歴史叙述」と言えよう。博識は全篇に溢れ随所に深い洞察が示されている。彼の特色はその歴史

叙述を貫く聖霊信仰であろう。⁽⁶⁾

ノッティンガム大学のウォッツ(M. R. Watts)による総合的解釈も注目されている。⁽⁷⁾ 彼は「第18世紀の福音信仰覚醒運動は、国際的な現象であり、大陸間の現象でもあった。」と述べる。⁽⁸⁾ 即ち、この運動はドイツ、イングランドとウェイルズ、及び、アメリカを結び合わせた。従ってただ一国の運動を分析するだけでなく、国際間と大陸間の運動の相互影響を考察しなければこの課題に対する十分な理解は得られないとする。ウォッツは論及していないが、筆者はこれらに更に2点を加えたいと思う。第1点は、福音信仰覚醒運動とローマ・カトリックとの関係である。フランスのみならず、英国国内でのローマ・カトリックとの関係にも目を開くならば、上述の関係や相互影響への視野はもっと広がるであろう。第2点は次のことである。即ち、ウォッツの言う、ドイツ、イングランド、ウェイルズ、及び、アメリカを事実上、結んだ人物として、ホイットフィールドやジョン・ウェスリを再認識する必要がある。そのような意味で、これら福音派の先駆者たちは国際的に靈的覚醒をおこし、大陸間を駆けつつその運動を展開したのである。

今日の研究者の中で最も注目すべき人物は、既述のウォールシュであろう。彼の諸論文は、福音派研究を政治史、社会史、文化史など広い視野で取り扱っている。⁽⁹⁾ 原資料を丹念に客観的に読みとっていく能力と、鋭い分析による全体像の把握とが抜群である。彼の研究に多くを負いながら、以下において、まず、国教会福音派を概観して見たい。

II 英国国教会福音派の概観

A 福音派胎動の時代的背景

1660年、チャールズ2世による王政復古以後、それまでほぼ1世紀をこえて国教会内を支配してきたカルヴィニズム勢力は、急激な抑圧と封じ込め政策に出合って衰退の一路を辿るこ

ととなった。ウォールシュは、カルヴィニズムの伝統的凋落がうんだ国教会内の靈性上のアンバランスを、福音派胎動の時代的背景と考えている。

チャールズによる一連の弾圧令とは以下のようなものであった。1661年12月、「地方自治体法」(Corporation Act) が制定されていわゆる“non conformist”(非信従派) また、“separatist”(分離派) は、地方自治体の公職から閉め出された。⁽¹⁰⁾ 1662年8月の「礼拝統一法」(Act of Uniformity) は、すべての聖職者に『祈禱書』の承認を要求し、教区に留った者や一、二の主教を除き、これを拒否する聖職者はすべて追放された。いわゆる「黒いバーソロミューの日」、ピューリタンの伝統を堅持する少なくとも1,000人以上の聖職者(全聖職者の約20パーセントに当るとも言われる)が、自分たちの教区を追われた。⁽¹¹⁾ 1670年の「集会法」(Conventicle Act) は、非国教徒4名以上の集会を禁止し、違反者は厳罰に処せられた。⁽¹²⁾ 1665年の「5マイル法」(Five Mile Act) は、追放された聖職者はその教区から5マイル以上離れているべきことを規定した。⁽¹³⁾

一連の抑圧政策の結果、国教会内のカルヴィニズム的伝統は大きく後退した。実はこの政策の背後には、従来の教会的伝統と政治体制との密着に対する一般の批判が介在していたと言われている。内戦と共和政、王の殺害と国教会体制への抵抗、分派に見られた律法軽視の風潮などのすべてが、「カルヴェンの陰影」として片付けられたきらいが強い。国教会の中で支配的であった伝統的なカルヴィニズムが、今や「無知蒙昧」、「些事を詮索するスコラ主義」、「熱狂や妄想のたぐい」などの汚名を着せられ退けられたのである。

1688年から翌年にかけての名誉革命体制や例の「寛容令」(Toleration Act) が、少数反対派とか体制非信従派とか呼ばれている人々の立場を改善したことは周知の通りである。ただ、この体制をどう評価するかに関しては、意見がまちまちである。「非体制勢力による旧体制の

形骸化」とも見られ、「体制的教会側による反体制勢力の押収」とも論じられている。⁽¹⁴⁾ いずれにせよ、1720年代には、カルヴェンの伝統を保持する国教会派は、まことに少数派と化していた。数多くの偉大なピューリタンが残してくれた著作は、本屋の片隅に売れないまま積み上げられていた。このように宗教改革の古い伝統を掲げてきた人々が、上述のような形で急速にしかも全体的に没落する現象は、国教会内の靈的バランスを大きく狂わせ、社会全体にも大きなひずみを生じる要因となった。

なるほど、国教会福音派が胎動しやがて勃興してくる時代は、政治的に見れば比較的安定した時代であった。名誉革命からハノーヴァー朝成立へと進み、ウォルポール政権の支配下(1721年—1742年)、「ウォルポールの平和」が謳歌された時期だからである。トレヴェリアンによれば、第18世紀の英国は「同意による解決と既得権益の攪乱をできるかぎり回避した」時代を迎えていた。安定、現状の維持、妥協、冷静が時代的特色であった。しかし同時に、「既成の宗教団体によって社会生活のうちにつくられた……広い間隙」⁽¹⁵⁾ は如何とも仕様がなかった。ウォールシュが言う「国教会内における靈性の空白状況」である。国教会は靈的熱情を失い、教区司祭も「道徳についての冷たいおしゃべり」⁽¹⁶⁾ を続けることが多かった。「国教会所属の牧師たちは概して平易で分りやすい説教をしない。従って彼らの勿体ぶった美辞麗句は、普通の聴衆の心に何の印象も残すことなくその頭上を通り過ぎ」、「疲労と無気力に沈んでいる一般民衆の気持を引き立てる何かが必要だった」とする、同時代人サミュエル・ジョンソンの評言は傾聴に値する。⁽¹⁷⁾ クェーカー派さえ、従来の民衆の信仰覚醒運動より、静穏さを求める傾向を示していた。全体的に見て、当時の宗教界は時代的激変を前にして徐々に変化の度合いを増しつつあった時代的要請に、十分に対応していたとは申せない状況にあった。

このような教会内外の「靈的アンバランス」を解決するために胎動していた勢力が、福音信

仰覚醒運動を推進した福音派であり、国教会福音派だったのである。彼らの重要性は今後、研究の進展とともに益々再認識されるに違いない。

B 福音派の勃興と発展

福音派及び国教会福音派の初期の進展に関する論述は次章以降にゆずり、本項では彼らの全体としての流れと彼らが取り組んでいた課題とを、ウォールシュに従って調べることにしたい。

1 起源における複合的作用

福音派と呼ばれる人々がどこに源泉をもつかについては色々と研究されているが、ウォールシュは、それを高教會的靈性の伝統（ジョン・ウェスリの場合を考えて見よ）、抑圧されてきたピューリタニズムの伝統の噴出、及び、自由主義的、合理主義的傾向への反発という3要素の複合的作用に見ようとしている。総じて彼らは、第17世紀の靈的無力さをはねかえし、古代教会から中世を経て流れてきている「福音的靈性」を復興し、宗教改革者の信仰義認の高調とパーキンス（William Perkins）らが提唱した個人的回心の復興とを試みたのである。事実、彼らのうちのある者たちは、「アウグスティヌスの回心」を経験した。他の人々も罪の苦悩と救いへの渴望の果てに「悔改めと福音信仰の確立」を経験している。スコット（Thomas Scott）の *The Force of Truth* (1779年) は、靈的遍歴を記した自伝として有名である。ただ、彼の回心は知的要素に富むものであり、ピューリタンの古典を学びつつ与えられたものであったと言う。ジョン・ニュートン（John Newton, 1725-1807）は、奴隷売買の船長としてアフリカ貿易に従事していたが、回心とともに職を捨てオルニヤロンドンで福音派聖職者として伝道を続け、讚美歌作家にもなった。これらの人々を調べていると、ウォールシュが指摘する要素を容易に見出し得るのであるが、彼ら

に共通している「合理主義への反発」を次に取り上げて見よう。

2 自由主義的、合理主義的傾向への反発

当時は、「聖書批評学誕生の前夜」であったが、理神論者による聖書批評は激しさを増していた。国教会徒の中にも新しい信仰告白へ転じる者が現われた。トーランド（John Toland, 1670-1722）やウルストン（Thomas Woolston, 1669-1731）ら「自由思想派」は、益々、聖書の「自証」又は、「外的証言」と言われる点への攻撃を強めた。⁽¹⁸⁾

このような傾向に反発した福音派が、聖書の「内証」への強調へ向ったとしても不思議ではない。当時の国教会において、聖靈の教理は軽視され、信仰生活における経験的要素を高調すると、「熱狂派」として指弾されるのが常であった。彼らは恐れることなく、この道を歩むこととなった。

3 福音派の発展

多くの福音派集会やソサエティが生まれた。それらはやがて「結合」(connexions) と呼ばれる組織体となっていく。福音派が反対派から「メソジスト」と総称されて攻撃されたことは誤解から生じたことである。福音派リーダーの多くは国教会派だったからである。

彼ら福音派が独自の按手礼を行なうようになったのは初期ではない。モラヴィア派に走ったインガム（Benjamin Ingham）によるものが1756年、ハンティンドン伯夫人によるものが1783年、ジョン・ウェスリによるものが1784年と比較的に遅い。ウェイルズのカルヴィニスト・メソディズムのグループに至っては1811年までは按手礼を執行しなかった。

国教会福音派は徐々にメソジストから区別され、むしろメソジスト運動に批判的な立場をとる者たちも現われた。彼らは“awakened clergy”, “Gospel clergy”, “serious clergy” などと呼ばれてきたが、第19世紀初頭に「国教会福音派」と称されるようになった。Cornwall や

Yorkshire が活動の中心地であったが、初期には組織化されずに教区を越えた福音派グループとして運動した。

主教の中にはこの派の聖職者に按手礼を授けるのを嫌った人物もいたようで、なかなか活動の場が与えられなかったが、1770年代になると彼らの勢力は強固となり支持者も増大した。彼らの活動ゆえに国教会信仰への確信や忠誠が増したことは皮肉といえば皮肉なことである。彼らを「異教徒的司祭」とか「不確かさのかたまり」と呼ぶ悪評は止んだ。「アングリカンの粉に福音というパン種を入れること」は陽光を浴びた。彼らは自分たちのソサエティ、又は“parsons clubs”をつくって集合した。Truro (Cornwall), Elland (Yorkshire), Rauceby (Lincolnshire) などにソサエティができた。それらは牧師館での友好にみちた集いであり、後に福音派聖職会議へと発展していく。そこでは現今の牧会的課題が討議された。「農夫をどう導くか」、「古い説教をもう一度用いる時には、どのくらい間をあければよいか」などを話し合い、御言の学びや祈りが続いた。

これらのソサエティは連合体を作り始め、国民的規模のものとなって1790年代には宣教団体を生み出した。1802年、マコーリ (Zachary Macaulay, 1768-1838) を主筆とする *Christian Observer* 誌の発刊を見た。

国教会福音派は、非国教徒をして国教会へ復帰させようと励む。39箇条、『説教集』、典礼書などに含まれている宗教改革の諸原理を訴えた。フッカー (Richard Hooker)、ジュール (John Jewel)、ダヴェナント (Davenant、ドルト会議への英国代表の一人)、ホール (Joseph Hall)、レノルズ (Reynolds)、ホプキンス (Hopkins) やレートン (Leighton) らの著作が常に引用された。「異端」や「熱狂派」との中傷に負けず、自分たちこそ宗教改革者の伝統を継ぐ者であると自負していた。ただ、彼らが防御にまわらねばならなかった3点が存在しており、それらをめぐって攻防が続いた。以下でそれらを検討して見よう。

4 「カルヴィニズム」への攻撃

第18世紀における国教会福音派は、ウェスリからアルミニアンも存在していたが、大多数がカルヴィニストであった。従って彼らは極力、国教会内部に存在しているカルヴィニズムへの偏見を是正しようと努めた。カルヴィニズムは、「赤ん坊さえも予定された通りに地獄の火に投げ込まれる」と教える「道徳的世界でのある種の怪物」と恐れられていたからである。彼らは又、二重決定説は信仰覚醒運動の宣教精神や生活上の敬虔の高調と背反すると意識し始めていた。

例えば、ヴェン (Henry Venn) は、「東部における国教会派カルヴィニストは、理神論者よりも恐るべき悪である。」などと自派を戒めている。国教会福音派の人々自身、「カルヴィニスト」を自称するよりも、「アウグスティヌス派」と称し、殆んどは「国教会派」と答えるのを常としていた。本来、選びや予定の教理は秘教的要素が強い。従ってニュートン (John Newton) が述べたように、説教におけるカルヴィニズム的要素は、「一杯の紅茶の中の砂糖のように、味わうべきだが砂糖の形のままで出合われてはならない」のであった。予定と自由意志との関係の問題に入ると国教会福音派は更に控え目になっていく。このようにカルヴィニズムを穏健化することによって「カルヴァン派教会はジェントルマンの宗教にあらず」とされていた当時の悪評を克服しようとしたのである。

ウォールシュはこのような彼らの神学的立場を、ピューリタン神学とフランスのソウミュール神学 (Théologie de Saumur) との中間を志向するものと評している。¹⁹⁾ 注目すべき発言だがここでは詳論せずに、後日、稿を改めて英国国教会におけるカルヴィニズムとアルミニアン神学の神学的思潮を論じることとする。

5 「熱狂主義」という攻撃

時代的背景の項でも触れたように、当時の人々は社会的にも宗教的にも「熱狂」を恐れた。

例えばサミュエル・ジョンソンは、「内的な光」を説く人々は社会的市民的平安を害すると恐れている。共和政を恐れる人々にとって、聖霊の個人的感化を高調する者たちは現在の政治体制を覆す者と映った。メソディズムがあればほど激しい反感や攻撃にさらされた理由がここにある。神学者たちは、福音派の「狂信的妄想」が自由思想的キリスト教の成長を促すことを恐れた。

無論、反感と偏見をもって攻撃する側だけを批判することはできない。福音派の人々の間にも識者の目には常軌を逸した「集団的ヒステリー」としか映らないような脱線もあったからである。ただ、これらの民衆の敬虔運動を国教会福音派が奨励したと誤解しない方がよい。こういった狂信グループを最もきびしく批判したのが、福音派の人々だったからである。ただ次のことは言える。「教区民や民衆が求めていたものを多くの教区教会は満たしていなかった。教会が持っていた熱情以上のものを彼らは求めて、福音派聖職者の許へやってきた。熱情はかき立てられるが、すぐにさめてしまうのである」と。

福音派聖職者も「熱情の持続」に苦慮した。週間に催される諸集会、聖書の講義、牧師館の台所で開かれる祈り会などが試みられた。彼らは民衆に熱狂を禁止することはしなかったが、異常な体験や突発的な回心経験や種々の靈的見聞などを「注意深く扱うように」指導した。これらを公けにすることに至極、慎重であった。どんなに鮮烈な自己体験であっても、それだけでそれが聖霊の臨在の確実な証拠とされることを厳禁した。

では、聖霊の臨在を確認する道はないか。通常は、「恵みの手段」によるのである。個人的な祈り、公同な礼拝、聖餐の尊重、就中、みことばの学びを通して聖霊の恵みはくだる。この点を強調したところに、福音派の貢献を見る。聖霊と聖書と教会生活をしっかりと結びつけたのである。再生の恵みは、個々の経験 (experiences) によってではなく、キリスト者生

活に共通する、聖化の体験や神と人への愛の経験 (experience) によって確かなものとされる。なるほど福音派の支流は多く、その説くところは多様であった。ある人々は「恵みの手段」を越えた種々の道を説いた。しかしながら、上述の「かなめ」が確実でなかった運動はやがて氷解し自滅していったことを思うとき、「ひろがり」とともにこの「かなめ」の大切さを改めて教えられる。

6 「教会秩序を乱すこと」への攻撃

福音派進展の最大の障害は、「教会の秩序を破る」ことを不本意ながら行わざるを得なかった現実に存する。福音派は漸進的ながら国教会内の尊敬を受けるようになっていった。初期の伝道者たちは高位者から追求を受けたとき、回心者の多さをもって弁明してきた。ウェスリやホットフィールドは教区を越えて宣教した。しかし彼らと同じ道を選んだ者は決して多くはない。大多数の福音派は教区に留って、教区民や周辺の人々にメッセージを伝えた。両者に共通なのは、「われらは滅び去る人々を前に、今、緊急事態に置かれている」という意識であった。

緊急性は時に反合法性を生んだ。だが、それ以外のどんな方法で教会の外にいる民衆に接近できるのか、と彼らは反問する。教会へ行かない人々、植民地の人々、新興工業地帯の人々に対し、誰が、いつ、どのような方法で接近するのか。教会秩序の至高の目的が、「人々をサタンの手から救い出すこと」にあるならば、この目的に合致する限りにおいて教会秩序に価値があるのだというのが、ウェスリらの確信であった。

このような考え方は、当然、教会での「一般的な」見方と衝突する。一般的な見方を支持する立場の福音派は問う。「聖職者の役割は、英国国教会の教理とともに教規への忠誠を命じるところにある。非合法伝道は短期間的には成功したように見えても所詮は混乱と失望に終るのではないか。非合法的方法で行なわれる野外説

教で回心した人々も、その多くは教区教会に留ることになるのだから、結局は合法的説教で育てられるのではないか。パウロも秩序を重んじるように訓戒した。全体的に見れば、国教会内で伝えられる福音の方が、国教会外で伝えられるものよりも優っている。信徒の敬虔は聖職者の指導のもとでこそ、健全に育つものである。」ある国教会福音派指導者もこう勧めた。「活力ある宗教は、公同性を持つものである。教会による穩健さを与えられてこそ、すべての運動は永続する。」

非合法的伝道にふみ切らざるを得なかった立場の人々として、異なった土台に立っていた訳ではなかった。教会観は同じであったし、国教会教理の純正さ、教会政治や教規の長所、三職階制、主教職が古代教会以来のものであることへの確信などにおいて、両者には共通の見解が存在していた。イングランドの独立派やスコットランドの長老派に欠けているものは主教制であると、両者とも考えていた。しかし、それは唯一無二の教会政治制度ではない。教会に主教が存在するのであって、主教ゆえに教会が存在するのではない。主教制以外の多様な教会政治形態は存在するし、むしろそれは古代教会以来の伝統でもあるとウェスリらは考えていた。

7 二つの道

さて、ウェスリやホイットフィールドらが救霊の緊急的要請に立ち、「時には非合法的方法を用いてでも民衆に福音を宣べ伝えたい」と活動していた際には、国教会と福音派の間には一種の緊張関係が生じていた。この関係は誤解や中傷や相互攻撃を生んだが、同時に、両者の内部にある種の活性化をもたらしていたことは事実である。ところが国教会福音派が次々と国教会に忠誠を誓い、その体制に恭順を誓うようになっていった時、このすぐれた緊張関係は崩れてしまい、福音派牧師は左遷などの手段で抑圧され反対勢力に取って代わられる結果が生じてきた。そこで、教会制度を保持するために福音派本来の伝道を無力化されてよいのかと反発

した人々は、「教派の形成」へと向かっていった。福音からの分離よりも、むしろ教会からの分離の方が益であると、「分離的傾向をもつ人々」は確信していた。

福音派内部に生じたこれら二つの傾向に対し、今、その是非を断定することは難しい。いずれにせよ大部分の国教会福音派は、メソジスト派などとは別の道を歩んだ。そして彼らは第19世紀初頭には国教会内部において単に「分派的」などという批評では片付けられ得ない堅実な地歩を築いていた。だが、われわれとしては目を再び第18世紀初期に転じ、そこで開拓者的役割を果たした「国教会福音派の先駆者」と「ウェイルズにおける信仰覚醒運動の先駆者」との考察へ移っていこう。

III 英国国教会福音派の先駆者たち

A トムソン (George Thomson, 1698-1782)

国教会福音派の父は、年代的に見る限りでは、トムソンであろう。1732年、彼はイングランド西南部、CornwallのGennys教会の聖職祿を得たが、回心体験を持たない牧師であった。青年時代、オックスフォード大学で法律を専攻し、しばらくはアメリカ植民地駐留軍のチャブレンなどを務めていたが、当時の一般聖職者同様、世俗的悪習を意に介さない人物であった。

任職後しばらくして、一晚のうちに3度も魂の深層を知らされるような悪夢を見た。神の審判におののいた彼は教区の主要な人々や友人たちを招き、信仰の確信を祈り求めるための休暇を乞うた。彼は聖書を学び続けたが、「塔の体験」以前のルター同様そこからは神の怒りと罪のおののきを示されるばかりであった。しかし『ローマ人への手紙』第3章を学ぶ内に「神は御子の贖いの血により、信じる者を義とし給う」との確信に至った。後年、ジョン・ウェスリらは彼のこの経験を1732年から翌年にかけての間の出来事と見ている。彼の回心がメソジス

ト運動とは無関係に、それらに先立って起ったことに注目したい。その後ウェスリと出会う前に彼はホィットフィールドと親交を結んでいる。即ち1739年、既に文通していたホィットフィールドと会い、数年後には彼を自分の教区に招いた。1753年までにウェスリも数回、彼の教会を訪ねているが、親交の度合いはホィットフィールドのそれと比すべくもない。トムソンがウェスリから分離したのは、彼のカルヴィニズム的、又はモラヴィア派的意見のためであるとされているが真偽の程は分らない。ただトムソンは死の床にウェスリを招き、彼から聖餐を受けたといわれるので、キリストに在る者たちの交わりの美しさを教えられる。

B ベネット (John Bennett, 1714-1759)

彼はおそらく、第18世紀英国における典型的なスポーツマン・タイプの聖職者の一人であったであろう。トレヴェリアンは、この時代の聖職者の生活の一面を次のように評している。「聖職者たちは、……世俗の大衆と、この時代の前や後のどの時代よりも、ある意味ではるかに親密な関係にあった。……治安判事としての牧師は、……密猟者に対するどうしようもない嫌悪心といったものはあまりもっていなかった。猟場に黒衣をまとう聖職者が現われても、福音主義運動が盛んになるまでは、ほとんど批判されなかった。」⁽²⁰⁾ ベネット自身、狩猟をはじめあらゆるスポーツを愛好した人物であった。チャールズ・ウェスリによると、彼が回心に導かれたのは、上記のトムソンによる。⁽²¹⁾

1747年、彼はウェスリ派の巡回伝道者となり、Derbyshire, Cheshire や Lancashire 地方を巡った。1749年、ジョン・ウェスリがひそかに結婚相手と心に決めていた Grace Murray と結婚したが、この頃からベネットのウェスリ批判は激しくなっていた。1752年、「教皇的存在に甘んじているウェスリ」からの分離独立を宣言し、多くの信徒も彼に従った。以後、カルヴィニズム的傾向を増しつつ、生涯を独立派

牧師として通した。

C ハーヴィ (James Hervey, 1713/4-1758)

オックスフォード大学リンカン・コレッジの学生として、若きフェロー、ジョン・ウェスリと出会う。このフェローは貧しい学生たちへの愛の配慮にみちた人物であった。しかし、ウェスリがそうであったようにハーヴィも又、福音信仰に確く立つ身ではなかった。彼は病氣となって療養生活を送り、その生活のただ中でトムソンの説教をきいて回心経験を得た。同時に、ハーヴィの経験はホィットフィールドの導きによるものともされている。ハーヴィはローマ書の信仰義認をヤコブ書と背反するものと考え続けていたが、ホィットフィールドの指導をうけて福音信仰に立つことができた。

健康を回復した彼は、1739年に Exeter で按手札をうけ、Bideford で副牧師として働くこととなった。その聖職祿は実に少額であったが伝道の成果はあがり、主日朝礼拝を2度に分ける程になった。週日の聖書の学びや子供たちへのカテキズム・クラスも開いた。ソサエティの形成に力を尽した。「それは教会と相反することなく、むしろそれに信従することになる」というのが持論であった。

1743年、彼は新任の主任司祭によって解職されたが、他の副牧師職を得てその教区に奉仕した。文筆活動にすぐれていた彼は、霊想書の出版を通して覚醒運動に貢献した。時は正に「パンフレットの時代」と呼ばれるほどに多くの出版物が世に問われた時代である。ハーヴィのペンも大いに活躍した。彼は徐々にカルヴァンの著作や神学に傾倒し始めた。ウェスリからそれを信仰生活における無律法的傾向と批判されてからは、両者の親密な関係は損われて再び会うこともなくなってしまった。

D ウォーカー (Samuel Walker, 1714-1761)

ウォーカーはホィットフィールドと同年月日

に生まれている。オックスフォード大学エクセター・コレッジに学び、そこで後に同じ運動に挺身するタルボット (William Talbot) と出会った。ウェスリの知遇を得ていないなどは想像できないのだが、何の記録も残されていない。ハーヴィとは大学時代に知り合っている。

ウォーカーは奨学金を得損ったので、止むを得ず聖職者の道を志したという変なスタートをしている。いくつかの副牧師職を経て1746年に Truro へやってきたが、そこでもカード遊びやダンスに打ち興じる日々であった。当時の一般の聖職者同様、彼もそのような日々を特に悪習と墮落の日々だと考えていたわけではない。しかし、スコットランド人でグラマー・スクールの校長をしていたコノン (George Conon) というすぐれた人物と出会い、回心へと導かれた。その出来事は町全体を一変させる程の影響をもったと言われている。

町の人口は1,600人程だったというのに、800人ほどが会堂に溢れた。「組」を組織した彼は『教会カテキズム』を出版して、それを「組会」において用いた。

以上、概観してきたように Cornwall 地方は、イングランドにおける国教会福音派の揺籃の地と言える。コノンは長老派教会の出身で後に国教会に入った人物であるが、彼が「国教会福音派における最初の信徒」であったとすれば、トムソンは「最初の聖職者」と呼ぶことができよう。ホィットフィールドやウェスリの回心以前に、メソジスト運動と直接的な関係を持たないこのような運動が進展していたことを、特に銘記しておきたい。年代的考察の次に地域的考察を加えておこう。

E ロウメイン (William Romaine, 1714-1795)

ロンドンを中心に福音派の伝道を支えていた人物にロウメインがいる。ホィットフィールドやウェスリの運動に同調して、教区を開放したり彼らを説教壇に招いた聖職者もいた。しかし彼らのメッセージをロンドンにおいて、定期的

に聞き得るために場を提供したのはロウメインであった。

彼は最初は教会内外での空しい栄誉を求める人物だったと言う。しかしロンドンに来てから回心経験が与えられた。彼は既に聖パウロ教会の説教者として、又、ヘブライ語コンコーダンスの編者として名声を保っていた。詳細な回心記は残っていないが、ひとりで聖書を学んでいた時に回心を与えられたとされている。当時、彼は福音派の人々とは何の関係も有していなかった。クライスト・チャーチ・コレッジの一員として「ホーリークラブ」も知っていたと思われるのだが、何の関係もうまれていなかったようである。1748年頃と思われる回心経験のあと、彼の福音的説教が開始された。1750年以降、メイダン (Matin Madan) やジョーンズ (Thomas Jones) とともに、彼はロンドンの主要な説教者となり、以後、Dunstan 教会が福音派の拠点となった。彼の著作中、最も著名なものは *Treatise upon the Life of Faith* (1763) であろう。

F グリムショー (William Grimshaw) とヴェン (Henry Venn)

目をヨークシャーに転じると、この地方で活躍したグリムショーとヴェンとがいる。まずグリムショーを点描してみる。彼は1734年頃、Todmorden 教会の副牧師時代に回心を経験した。1742年、Haworth 教会において説教者として多大の影響を与えた。西部ヨークシャーを巡回伝道し、教区を越えた巡回地域は更に伸びていった。週に10回から30回ほど説教したと云われている。ホィットフィールドやウェスリとは、彼らが北部を旅行した時に知り合い、ロウメインともハンティンドン伯夫人を介して知り合った。1757年にはニュートンと、1759年にはヴェンと協力伝道しているから、福音派の連携も強化されつつあったようである。

ヴェンは1724年、Surrey の Barnes において国教会聖職者の家系に生まれている。1742

年、ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・コレッジに入学した。1747年には執事の按手礼を受け、1749年から8年間はクィーンズ・コレッジのフェローとして教壇に立った。靈的生活の形成のためにロー（William Law）に学ぶ所が大きかった。1759年、ヨークシャーで伝道を開始し多くの会衆を集めたが、信仰義認のみを説いてキリスト者生活の重要性を軽視するとの中傷を受けたりした。著作は多いが、その中にはウェスリの『キリスト者の完全』を批判したものも含まれている。1761年、ウェスリ自身と討論して彼を少し理解することができた。自分の教区に彼を招いたりもしたが、ヴェンの穏健なカルヴィニズムは、結局、ウェスリのアルミニズムを理解し切れなかったようである。ヴェンは教会政治については寛容であったので、独立派など非国教派をも受け入れて彼らの伝道に協力している。それは1797年の没年まで続けられた。

G 小さなまとめ

国教会福音派の人々が献身したのは、宣教のためであり信仰覚醒運動のためであった。彼らに見られるものは、多様性と一致とである。彼らは実に多様な人々である。回心前の状態、回心の動機と経験の内容、及び神学的傾向も様々である。ある者は都会で働きある者は小教区を転々として奉仕した。しかし「単純な聖書の敬虔」⁽²²⁾を目標にした彼らは、宣教と覚醒運動において対立をこえて常に一致し交流していた。

福音信仰の確立、明確な回心経験の強調（ただし、突然の回心のみでなく、漸進的回心の例も少なくない）、「恵みの手段」を中心とした教会生活、信仰生活における「成長」など多様な活動を展開していたが、彼らに流れている靈的水脈は常に通じ合っていた。

時として、抑圧に出合ったり攻撃や非難にさらされたりもしたが彼らはひるまなかった。当時、一般的には信じることができない程の窮乏の中を、喜々として奉仕に当たっている。

文書活動の力も無視できない。更には教育活動や社会活動への拡がりにも注目すべきである。同時代に進行していた「キリスト教知識普及協会」(Society for Promoting Christian Knowledge, 略して S.P.C.K., 1698年, 国教会司祭ブレイ〔Thomas Bray, 1656-1730〕が植民地における教会援助を求められて準備をしている内に、国内のキリスト教知識の普及を痛感し、文書の配布、地方教会での図書館の設置、出版活動などのために設立したもの)や、1701年に設立された「福音宣教協会」(Society for the Propagation of the Gospel, 略して S.P.G.)との関連を忘れてはならない。諸著作の出版や読書の奨励は又、讃美歌の作詩や会衆による愛唱へと拡がっていき、広い意味での文化活動を形成した。福音派活動は、民衆の娯楽を禁欲的に抑圧したなどという揶揄が見られる。⁽²³⁾しかしこのような消極的評価は現実を正しく捉えていない。福音派が当時のある種の「悪習」に対して批判的なのは事実であったとしても、彼らのメッセージがあれ程、民衆の間にいきいきと根づいたことを知る時、より積極的で広汎な文化活動が福音派活動に伴っていたことを忘れてはならない。揶揄や風刺が物事の一面を鋭く指摘する場合も多い。しかし歴史的資料を広範囲に検討しつつ、より適切な評価をくだすことが必要ではあるまいか。

IV ウェイルズにおけるカルヴァン派的メソジスト運動の先駆者たち

第18世紀の福音信仰覚醒運動と言えば、すぐにウェスリやホィットフィールドの名を挙げる人が多い。しかしこの運動は、実はイングランドからではなくてウェイルズからその胎動を始めたのである。しかも、イングランドからウェイルズを訪ねる伝道者にはウェイルズ語の通訳者がついたという時代のことである。その時代にウェイルズ人によるウェイルズ信仰覚醒運動が起ったのである。そしてイングランドにもそれらがおこっていった。この事実を忘れて英国

信仰覚醒史を描くことはできない。

初期スチュアート朝成立に続く約50年間、ウェイルズは全く忘れ去られた山間地域であった。共和政時代には少し光がさし込んできた。1649年発布の政令は、ウェイルズへの宣教計画とその実行を命じている。3年以内にウェイルズの13州に少くとも150人以上の聖職者を置き、各市場町には1人の校長を配置せよという計画であった。30人の巡回伝道者が多くの信徒伝道者を指導すべく任命された。

ところがこの改革案も王政復古とともに中止され、ウェイルズは旧態依然たる地方に戻されてしまった。第17世紀のウェイルズは、「暗黒のヴェールにとざされた」地方と人々が嘆く程の悪弊悪習の地と化していた。ただ、このような社会の根本的改革を志した人々も存在した。オーエン (Hugh Owen) もその中の一人であった。最初、彼は聖職者を志したが、1662年の「礼拝統一令」の発布とともにこれを断念し、信徒として伝道に励んだ。彼はウェイルズの山地を馬で越えつつ、3か月に1度の割合で巡回できる自分の巡回区を設定した。嵐や寒さや病いと戦いながらも、彼の説教を待つ民衆の渴望を思いつつ各地を巡った。

教育史にも叙述されているガウジェ (Thomas Gouge, 1609-1681) も、⁽²⁴⁾ 同様の人物であった。14年間、Holborn Sepulchre 教会において主任司祭代行を務めた。やがて巡回伝道を決意し説教者としてウェイルズを巡回した。教育にも関心を示していた彼は、訪れた多くの町々に「無料学校」を設立し、1675年には計、51校を設立し、千人の子どもたちを収容した。このほか八千冊ほどの『ウェイルズ語聖書』を印刷して配布し、又、実際に職業訓練を施したりカテキズムや霊想書の出版に尽力したりした。ロンドンにいる篤志家は彼の活動を伝え聞き、献財をもってその活動を支援した。

A ジョーンズ (Griffith Jones, 1683-1761)

ウェスリヤホィットフィールドが回心する約

20年前に、ジョーンズは Carmarthenshire の Llandowror 教区を中心に宣教活動に励んでいた。彼は「体制非信徒派」の家庭に生まれたが教区教会で受洗した。青年時代には木製品の細工職人や牧童をして暮していたが、幻の中で召命をうけ、子どもたちにまじってグラマー・スクールに入学した。Clydan の Evan Evans の指導をうけて1708年に執事に任職された。エヴァンスは彼を宣教師にしようと考えていたが、彼は S.P.C.K. の普及員をしながら教区の副牧師にもなり、やがて教区を越えて南ウェイルズ地方全体をさまざまな迫害に耐えながら巡回伝道した。

1714年、主教 Adam Ottley はジョーンズが教区を無視して非合法伝道をしており、又、聖堂外の人々に説教をしているとの訴えにより彼を審問した。主教は、「もし他の教区牧師から招かれたのであれば、どの教区へ行って説教してもよい」との裁定を下した。しかし主教座尚書らからの攻撃は止まず、1715年7月にはジョーンズは長文の弁明書を提出せざるを得なかった。

1716年、彼は年俸25ポンドと住宅を与えられた。当時、貴族の年俸が1,200ポンド、ジェントルマンで400ポンドと推定されているから、⁽²⁵⁾ いかに山間僻地とはいえその貧しさが想像できる。しかし彼は牧師館を毎日の朝禱と晩禱に開放し新しい回心者を指導した。社会的良心に従ってウェイルズの困窮者救済にも励んだ。彼の最も顕著な貢献は、1730年に彼が設立した「慈善学校」(charity school) であり、彼の名は今日も数多くの教育史に記されている。⁽²⁶⁾ 慈善学校では子どもたちにも成人にもウェイルズ語で聖書が教えられた。又、2、3か月毎に巡ってくる「移動学校」も計画され、これらはイングランドの S.P.C.K. の支援をうけた。1761年、つまり彼没年の頃には、三千の慈善学校が開校され約15万人がその恩恵を受けた。この運動も教育機関の充実とともにやがて衰退して「日曜学校運動」へと変化していったが、ウェイルズにおいてメソジスト運動の足場となったのがこ

の「慈善学校運動」だったのである。ジョーンズの最大の貢献といえば、それは彼がウェイルズにローランドやハリス及びデーヴィスといった信仰覚醒運動の後継者をのこしていった点にある。

B ローランド (Daniel Rowland, 1713-1790)

彼は Cardiganshire の Llangeitho 教区主任司祭の次男として生まれた。1733年、20歳の若さで執事となり、ついで司祭の按手を受けた。大学教育を受けていない人物であったが学識にすぐれていた。宗教的問題よりもスポーツに打ち興じる日々をすごしていたが、教区牧師としての仕事にも励んでいた。ただ、彼の心は不安の中をさまざまに迷っており聖職者としてのより高い使命観とそれを遂行する霊的恵みを渴望していた。

時あたかも Philip Pugh という信徒伝道者が立ち、多くの会衆に福音を宣べ伝えていた。彼もピューの説教を拝聴した。神の審判のメッセージを熱情的な身ぶりで伝えていたが、ローランドはそれを真似てみても自己嫌悪に陥るだけであった。ここでジョーンズとの出会いが与えられる。説教をしていたジョーンズは、会衆席のローランドが福音的回心を経ていることに気づき心をこめて彼のために祈った。この集会でローランドは回心経験を与えられ、新しい存在となって教区に帰った。彼の一变によって教区も一变した。彼のうわさはウェイルズ中にひろがり、彼は教区を越えて活動した。ピューとローランドの出会いは、後年のペーター・ペラーとウェスリとの出会いを彷彿とさせるものがある。信仰について語れないと嘆くローランドに対し、ピューは「それが与えられるまで、信仰について語れなさい。」と勧めた。これは正にペラーがウェスリに与えた助言そのものであったからである。

さて、ジョーンズもローランドもともに国教会聖職者であった。彼らは高位聖職者から認め

られるようなタイプの人物ではなかった。ジョーンズ同様、ローランドも譴責を受けたり地位を追われたりした。1760年、副牧師の職を追われたが彼は他の教区を求めることなく、支持者たちによって建てられた建物を利用して説教を続けた。

1735年、次項でとり上げるハリスが信徒伝道を開始したが、彼がローランドの後継者として活躍することになった。これらの人々によって築かれた伝統を、人々は「ウェイルズにおけるカルヴィニズム的メソジスト」(Welsh Calvinistic Methodists)と呼ぶようになっていく。彼らのソサエティ連合の最初の会議は1743年に開催され、ローランドが指導者ホィットフィールドの代務者としての役割を担うようになる。以後、ハリスとの対立が起ったり主教の審問を受けたり、1763年には国教会聖職者としての活動停止処分を受けたりしたが、福音派牧師としての働きを最後まで止めなかった。

C ハリス (Howell Harris, 1714-1773)

ハリスはウェイルズの Trevecka で農夫の子として生まれた。Talgarth という村で校長の役目を担っていたが、飲酒や悪弊を止めることができず内的葛藤は激しさを増すばかりであった。彼の霊的再生は1735年春に訪れた。

その年の受難週主日に、彼は教区教会の朝礼拝に出席した。司祭は祈禱書を朗読しながら聖餐への良い備えを呼びかけた。「この聖餐への備えが十分でない者は、教会生活にも、いや、生にも死にも良い備えができていない者である」とのことばに彼は心を打たれた。堂外に逃げ出そうという誘惑と戦いつつ、それでも新しい思いに満ちて聖餐をうけた。その週は様々な疑いや恐れと戦う明け暮れであった。日々に親しむ聖書と霊想書によって備えをしながら、聖霊降臨日の主日礼拝での聖餐において、彼は福音信仰の確信にみたまされる回心経験を与えられた。それは又、彼の召命経験でもあった。

「私は私の心が火にかけられた油のかたまり

のように救主なる神の愛によってとけ去るのを覚えた。愛や平安だけでなく、キリストによってだけ解決される飢え渇きを覚えた。それは以前には覚えたことのない叫びであった。——アバ、父よ。父なる神の召しに対し、私は何の抵抗もできません。私は自分が既に子とされ、愛され、あなたによって聴き入れられていることを知っています。これで十分です。充ち足りています。火の中をも水の中をも進んであなたに従い行く力を与えて下さい。』²⁷⁾

1736年、彼はジョーンズと知り合った。ハリスは4度も聖職按手を拒否されたので教師の職に留った。しかし意を決して信徒伝道者となって南ウェイルズ一帯を巡回して福音を伝えた。同年秋、ジョーンズの勧めに従って最初のソサエティを組織した。1752年、New House に転じ、同地を覚醒運動の中心地とした。後にハンティンドン伯夫人の支援を受けて牧師志願者たちの訓練に当たった。彼は生涯、国教会を熱愛し離脱を考えなかった。ところが皮肉なことにローランドやホイットフィールドと協力したことから「ウェイルズにおけるカルヴィニスト・メソジスト派」の創立者の一人と見做されるに至っている。晩年はカルヴィニズム論争に関わったが、終生、ウェスリとの協力をも続け、1740年にはウェスリの「ファウンドリ」の補助者として彼を助けたりした。

彼を独裁者的傾向をもつ人物として批判する人々もいるが、彼の風格や説教者としての賜物はすぐれたものを与えられており、救いのメッセージを平易に説いて多くの人々をキリストに導いた。それらの人々の中にデーヴィス (Howell Davies) がいた。

デーヴィスはジョーンズの生徒であった。聖職者の道を進み Pembrokeshire の Llysfrfa で副牧師の職を得た。多くの人々が彼の福音的説教を聞くようになったが、この小教会の聖餐式から霊的覚醒の業が起った。彼もハリス同様、ハンティンドン伯夫人セリナの後援を受け、彼女のロンドン集会を助けた。

D 小さなまとめと次の展望

以上、述べてきたように、第18世紀初頭のウェイルズはジョーンズらの例外を除いて、その霊的状态は凋落の一途をたどっていた。そこへハリスやローランドの出現があり、デーヴィスら後継者たちを輩出するに至ったのである。1742年、これらのグループがホイットフィールドを招いたことから、国民的つながり、及び国際的つながりを与えられるようになり、又、ウェイルズの地域的連合組織の誕生を見るようになった。ウェイルズの福音派の人々は穩健なカルヴィニストを自認していたが、ウェスリを始めとするアルミニアン・メソジストのグループとも親交を結んだ。

ハリスもウェスリもともに国教会の伝統を尊びそれを誇りとした。従って国教会の内に留って教会内の霊的覚醒に励んだ。ただここで述べておきたいことは、彼ら福音派が「国教会内に留ろうとすること」から何を得たかということである。彼らは教会の外にいる人々に伝道しようとして民衆の中にとび込んでいった。国教会の権威者たちからは審問をうけたり処分を受けたりした。一般からは「メソジスト派」と恐れられ、たびたび暴徒の襲撃にさらされた。しかし彼らは黙々と個人住宅などでの集会を続け、やがて自分たちの集会所を持つに至った。彼らは相互の関係を密接にするため組織化に励み、「監督、勸士、会吏」など内部の役割を定めた。ところがこのような実践に励めば励む程、逆に国教会の枠をはみ出す結果が生れてくることとなっていった。

更に福音派内の対立が次第に明確となっていった。1750年にはローランドとハリスとの対立が表面化し、一度は和解にふみ切ったがやはり以前のような協力態勢は整わなかった。そして1801年には、チャールズ (Thomas Charles) らが「ウェイルズにおいてメソジストと呼ばれる人々の特別なソサエティの規約と目的」を定め、1811年には80人の信徒伝道者に按手札を授

けることを通して国教会からの分離を見るに至った。教会政治的には長老制であったところから、1842年にはイングランド長老教会と提携して「ウェイルズ長老教会」を設立し、メソジスト・グループからも分離していくこととなった。

さて、分離と訣別といえは信仰覚醒運動史上の大きな危機が1740年におこった。いわゆるホイットフィールドとウェスリとの訣別である。われわれはこの事件を考察する前に、ホイットフィールドなる人物を熟知せねばならない。そして両者の神学的背景の相違、すなわち英国におけるカルヴィニズムとアルミニアニズムの神学的潮流を歴史的に検討せねばならない。稿を改めてこれらの課題を考察することとしたい。

上述の諸点で強調したように、英国における福音信仰覚醒運動を検討するためには、まずウェスリやホイットフィールドから始めるのではなく、イングランドにおける国教会福音派及びウェイルズにおけるカルヴィニズム・メソジストの運動の検討から始めるべきである。その上でこれら先駆者の伝統が、中心的存在としてのウェスリやホイットフィールドにどのようにして受け継がれていったかが考察されるべきであろう。更に、この運動の国際的拡がりもあわせて検討されねばならない。福音派の信仰的水脈は決して衰えることなく今日も流れている。この自覚に立ち第18世紀と今日とを関連させつつ、今後の研究を続けたいと願っている。

注

- (1) F.L. Cross (ed.), *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, London: O.U.P., 1958, p. 477.
- (2) J. D. Walsh, "Origins of the Evangelical Revival", G. V. Bennett & J. D. Walsh (eds.), *Essays in Modern English Church History*, London: A. C. Black, 1966, p. 133.
- (3) A. Skevington Wood, *The Inextinguishable Blaze: Spiritual Renewal & Advance in the Eighteenth Century*, Grand Rapids: Eerdmans, 1960, pp. 129-133.
- (4) G. R. Balleine や G.W.E. Russell の概説書がある。
- (5) L. E. Elliott-Binns, *The Early Evangelicals: A Religious & Social Study*, Greenwich: Seabury, 1953. 前著とは、*The Evangelical Movement in the English Church*, London, 1928 である。
- (6) A. Skevington Wood, *op. cit.*
- (7) M. R. Watts, *The Dissenters I: From the Reformation to the French Revolution*, Oxford, Clarendon Press, 1978.
- (8) *Ibid.*, p. 394.
- (9) 前掲論文のほか "The Anglican Evangelicals in the Eighteenth Century", *Aspects de l'Anglicanisme*, Paris: Presses Univ. de France, 1974 や "The Cambridge Methodists", 及び, *Christian Spirituality: Essays in Honour of Gordon Rupp*, London: S.C.M., 1975. など。
- (10) David C. Douglas (ed.), *English Historical Documents*, vol. 8, London: Eyre & Spottiswoode, 1966, p. 136.
- (11) *Ibid.*, p. 137.
- (12) *Ibid.*, p. 139.
- (13) *Ibid.*, p. 138.
- (14) 塚田理 (編), 『イギリスの宗教』, 東京, 聖公会出版, 昭和55年, 58頁以下及び127頁以下を参照。なお, 名譽革命に関しては, 浜林正夫『イギリス名譽革命史』上, 下, 東京, 未来社, 1981年, 1983年が詳しい。
- (15) トレヴェリアン, 大野真弓監訳, 『イギリス史』3, 東京, みすず書房, 15頁。
- (16) トレヴェリアン, 前掲書, 17頁。
- (17) ボズウェル, 中野好之訳, 『サミュエル・ジョンソン伝』1, 東京, みすず書房, 1981年, 467頁。
- (18) S. L. Greenslade (ed.), *The Cambridge History of the Bible*, vol. 3, Cambridge: University Press, 1963, pp. 195-271.
- (19) Walsh, "The Anglican Evangelicals in the Eighteenth Century", p. 93.
- (20) トレヴェリアン, 前掲書, 14頁。
- (21) *The Journal of The Rev. Charles Wesley*, M. A., vol. 1, ed. T. Jackson, London: Mason, p. 369.
- (22) W. v. レーヴェニヒ, 赤木善光訳『教会史概論』, 東京, 日基教団出版局, 1969年, 409頁。
- (23) 一例としては, 角山栄, 『産業革命と民衆』(生活の世界歴史, 10), 東京, 河出書房新社, 昭和50年, 271頁など。
- (24) 『イギリス教育史 II』(世界教育史大系 8), 世界教育史研究会編, 東京, 講談社, 昭和49年,

200頁。なお、Wood は Gauge と綴っている。*op. cit.*, p. 40.

(25) 『岩波講座 世界歴史17』所収の論文，松浦高嶺「十八世紀のイギリス」261頁を見よ。

(26) 吉田喜由，『イギリスの教育』，東京，自治日報

社出版局，昭和47年，及び，田口仁久，『イギリス学校教育史』，東京，学芸図書，昭和53年などを参照。

(27) Wood, *op. cit.*, p. 50 より引用した。